

アメリカに社会主義はない？

——民主党の「左傾化」をどう考えるか

これまでアメリカ政治のメインストリームから

排除されていた社会主義への許容度が上がっている。

その背後でなにが起きているのか。

トランプ大統領への不信任感が引き起こしたねじれか、それとも深い変動の兆候なのか。

一九九〇年代前半以降のアメリカにおけるイデオロギー

的自己認識の変化を辿っていくと、一貫して自らを「保守派」だと見なす人が、自らを「リベラル派」と見なす人を上回っている（ギャラップ社による調査）。保守派の方は三〇％台後半を推移している感じだ。九二年以降の数字だと二〇〇四年が一番高く、四〇％に達している。これは自らを「穏健派」と見なす人とはほぼ同程度だ。これに比べると、自らを「リベラル派」だと規定する人の割合ははっきりと少ない。ところが少ないながらも、一九九〇年代半ば以降、はっきりと上昇傾向にある。九二年はわずか一七％だったのが、二〇一八年には二七％に上昇している。それ

は確実な漸増だ。

負のシンボル「リベラル」

当然、リベラル派は民主党の方に強く傾斜しており、党内では一九九五年の二五％から二〇一八年の五一％と倍増している。変化の起点は二〇〇〇年代半ばにある。この時期を境に、「リベラル」という言葉の響きがだいぶ変わった。きたためだ。〇〇年代半ば以前の時期、「リベラル」という言葉は、日本語でいう「左翼」と同じような響きを持っていた。それはもともとそうだったというより、八〇年代以降の保守派の攻勢を成した重要な言説戦略のひとつで、

慶應義塾大学教授

中山俊宏

なかやま としひろ 一九九〇年青山学院大学卒。米ワシントン・ポスト紙極東総局記者、国連代表部専門調査員、津田塾大学准教授、青山学院大学教授などを経て二〇一四年から現職。国際政治学博士（青山学院大学）。著書に「アメリカン・イデオロギー」「介入するアメリカ」など。

リベラル派は、大きな政府を追求、文化的価値相対主義を信奉し、プロチョイス（中絶支持）を訴える「極端な左翼」であり、こうした負のニュアンスを「リベラル」という言葉に詰め込んで、政治的再パッケージ化した結果だった。FOXニュース・チャンネルなどの保守系メディアで、リベラルという単語が発せられるとき、冒頭の「リ」がことさら強調されるようなかたちで発音されると、それが「左翼」という響きをもっていることがよく伝わってくる。

この言説戦略は功を奏し、「リベラル派」自身が、同じ土俵で競うことを早々とあきらめ、「リベラル」を代替する他の政治用語を求めだす。その典型が「プログレッシブ」だろう。〇〇年代冒頭、「リベラル派」の政治的動員の効果を上げることが意図して設置された「セクター・フォー・アメリカン・プログレス」というシンクタンクがあるが、当時、名称にリベラルという言葉を組み込むことはとうてい考えられなかった。

しかし、雰囲気が変わってきたのが、〇〇年代半ばだ。それは、〇四年の大統領選挙でグラスルーツの左派を動員し、一時、民主党の予備選挙でトップを走ったハワード・ディーン元バーモント州知事のインパクトが大きい。ディーンは、イラク戦争への不信感を梃子に、当時民主党

の中で勢いを吹き返しつつあった左派を活気づけ、正面から「リベラル派」の候補として選挙戦に臨んだ。ディーンは、自分のことを「民主党の誇り高き民主派（Democratic Edge）」だと位置付け、保守派の攻勢を横目に政治的な「ポジションどり」をしようとする主要候補たちを激しく批判した。

ディーン・キャンペンそのものは、予備選挙が進んでいくとあっけなく敗退してしまったが、それはいわば民主党の自己認識に深い痕跡を残した運動であったとも言える。敗退後、ディーンは民主党全国委員会委員長に就任し、グラスルーツ路線を強化していく。ディーンがいなければ、〇八年の大統領選挙におけるオバマ候補の勝利はなかったとまではいえないが、オバマの勝利のひとつの要素を構成しているということは言えるだろう。ディーン旋風は、「リベラル」という負の烙印を克服する上で、大きな役割を果たした。

「リベラル」の活性化

二〇〇九年一月にオバマ政権が発足すると、リベラル派の大きな期待に反し、「デモクラティック・ウイング」の方向に大きく舵を切るより、「イデオロギー的な橋渡し」

そのものを自己目的化しようとするオバマ大統領への苛立ちが生まれ、党内左派、とりわけそれまで政治的回路に組み込まれることのなかった左派グラスルーツが中心となり「オキュパイ・ウォールストリート運動」が「発生」する。オキュパイは、「格差」の問題を梃子に、「ネットルーツ」を政治的に動員し、資本主義、ビッグビジネス、そしてグローバル化に対する敵意を露わにしたことで世間を驚かせた。アメリカに、「反資本主義」を掲げる運動がこれだけはっきり可視化されたのは久しぶりのことだった。

しかし、体制イデオロギーの核にある資本主義に対する不信任感、とりわけビッグ・ビジネスに対する不信任感、予想以上に一貫して強い。ギャラップが行ってきたアメリカ社会を構成する諸組織への信頼感 (Confidence in Institutions) に関する調査を見ると、一九七三年以来の調査の中で、ビッグ・ビジネスを「大いに信頼する」と答えた人の割合が一〇%を超えたのはわずか一回しかない。超えたといっても最高値が一%であり、多くが一桁台後半だ。ビッグ・ビジネスは議会とあわせて最も信頼されていない主体のひとつである。こうした傾向とは矛盾するようだが、労働組合への信頼感も同様に低い。これは労組が「利益団体政治」の一角を構成する存在に墮したとい

う意識の現れだろう。

いずれにせよ、こうしてリベラル派が活性化し、従来の資本主義のあり方に対する敵意を露わにするような運動が発生したことを背景に考えると、二〇一六年の大統領選挙でバーニー・サンダース上院議員が、いわば「サンダース旋風」を巻き起こしたことはそう不思議なことではない。

しかし、サンダース・キャンペーンは、アメリカを想像していなかった方向に連れていった。それは「ソーシャリズム (社会主義)」という言葉の復権だ。〇八年の大統領選挙で「配管工のジョー (Joe the Plumber)」が、オバマ候補を「社会主義的」だと批判し、一気に保守派の政治的スターにのし上がった事例に言及するまでもなく、リベラル派を糾弾し、貶める政治用語として、「社会主義」はアメリカ政治において常に有効であった。それが、ポジティブな政治的シンボルに転化することなど、考えにくかった。しかし、一八年にピュー・リサーチ・センターが行った調査によれば、少なくとも民主党員の間では、社会主義という言葉に関し、「とてもいい印象を持つ」「どちらかといえばいい印象を持つ」と答えた人が、全体の六五%にも達していて、資本主義に対しての同じ質問に対する回答の五五%を上回っている。ちなみに共和党員の間では、それ

それ一五%と七八%である。また二〇二〇年大統領選挙の民主党の大統領候補を見渡しても、たしかに中道左派のジョー・バイデン前副大統領が一貫してトップを走っているが、左派候補のサンダースとエリザベス・ウォーレン上院議員を合わせるとバイデンを上回っている。ちなみにウォーレン候補は、自分のことを市場経済を支持する「キャピタリスト」と位置付けているが、サンダースと政策的に重複することは明らかだ。

また、スクワッド (Squad) の異名をとる新人女性下院議員四人のうち、アレキサンドリア・オカシオ・コルテス下院議員、ラシーダ・トゥレイヴ下院議員の二人は「デモクラティック・ソーシャリスト・オブ・アメリカ (DSA)」に所属し、イルハン・オマー下院議員はデモクラティック・ソーシャリズムに共感を示している。オカシオ・コルテス議員は、いま下院で最も自分を見せることに長けた「メディア・ア・サビー (media savvy)」な政治家の一人であることは言うまでもない。アメリカにおける社会党の正統の継承団体であるDSAは、〇〇年代まではメンバー数が数千人の泡沫組織であったが、ここ数年で急激に数を増やし、いまや六万人に迫る勢いである。六万人といえは、人口三億人の国ではいかにも弱小組織のようにも見えるが、テイー

パーテイー運動を構成した諸々の団体の当初メンバーも同じような数だったと言われている。ここにサンダース候補を支持する若者などを重ねていけば、六万という数字以上の影響力を、すでに持ち始めていることは明らかだ。

アメリカにおける社会主義のルーツ

しかし、それにしても、アメリカには社会主義はないことになっていたのではないか。アメリカにおいては、社会主義者自身が、「アメリカにおける社会主義はわれわれの願望の名称に過ぎない」(アーヴィング・ハウ、ルイス・コッザ)と述べていたほどである。ヴェルナー・ゾンバルトが、一九〇六年に『なぜアメリカに社会主義はないか? (Why There is No Socialism in the United States?)』を著して以来、そのテーゼはアメリカを理解するための第一歩として当然視されてきた。

ゾンバルトは、アメリカにおける社会主義は、ローストビーフとアップルパイの前に頓挫する運命にあると論じたことで有名だ。アメリカにおける社会主義は、豊かさ和社会的上昇の期待感の前に頓挫せざるを得ない。そしてそうした社会的上昇の可能性が開かれている国における労働運動は、体制内の労働者の権利獲得運動にとどまり、社会主

義の方向には進んでいかないと、ゾンバルトは論じた。

しかし、ゾンバルト自身、そうした傾向は、「豊かさ」という条件に支えられているものであり、その「(体制としての)豊かさ」の存続が危うくなれば、アメリカもその限りではないと論じていた。この、ゾンバルトのテーゼの「限界条件」を強調して、「なぜアメリカに社会主義はないか」を再紹介したのが、D S Aの創設者の一人でもあり、『もうひとつのアメリカ——合衆国における貧困 (The Other America)』(一九六二年)の著者でもあるマイケル・ハリングトンだった。この『もうひとつのアメリカ』は、貧困に喘ぐ「見えないアメリカ」の存在を告発し、公民権運動に道義的な基盤を与えた一九六〇年代を代表する著書の一つである。

しかし、ゾンバルトの「なぜアメリカに社会主義はないか」というテーゼそのものに疑義を呈し、アメリカには一貫して社会主義が存在していたという主張がある。それはアメリカ史の中に左翼的伝統を見いだそうとするアメリカン・レフトの言説戦略でもある。いわば歴史の読み換えといってもいい。つまり、アメリカには一見すると社会主義はないように見える。むしろ、それを排除しようとする歴史的事例の方が目立つ。パーマーの赤狩り、マッカーシズ

ム、そしてその最新形態はティーパーティー運動だろうか。しかし、アメリカにおいて、社会主義が不在であるように見えるのはそれが不在だったからではなく、むしろ建国の理念そのものの中に他の国であつたら社会主義と形容されるような理念が埋め込まれているからであり、そういった観点からアメリカ史を見直すと、表面的な不在とは裏腹に、社会主義的伝統を一貫して見いだせるという議論だ。

アメリカ流の社会主義と社会正義

ただし、ヨーロッパにおけるそれと決定的に異なるのは、アメリカにおける社会主義運動は、マルクス主義的社会主義 (Marxian socialism) に根ざしたのではなく、むしろソーシヤル・ジャスティスの観点に根差したものだということ点だろう。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけても、体制内変革を志向したサミュエル・ゴンパースのアメリカ労働総同盟 (AFL) の外縁で、戦闘性の高い労働争議が繰り広げられていた。こうしてみると、アメリカの建国の理念、一九世紀後半から二〇世紀前半のラディカルな労働運動、バーニー・サンダースが尊敬してやまないアメリカ社会党の指導者ユージーン・V・デブス、ニューデール官僚のアメリカナイズされた社会主義、そして戦後の

ニューレフトの存在など、実はアメリカ史の要所要所で、アメリカ化された社会主義は一定の役割を果たしてきたことがわかる。それは、アメリカ政治のメインストリートから見たら脇道ではあっても、思いのほか太い道である。

しかし、このアメリカの左翼的伝統は、一九六〇年代のニューレフトが頓挫し、さらに保守革命が進行する中、ついで忘れ去られてしまった。冷戦という大きな文脈の中で、それが敵対する側の体制イデオロギーだったことも（すくなくともかたちの上では）、「社会主義」をより不利な状況に追い込んだ。それが呼び起こされたのは、保守革命を主導する側が、せいぜいキャンパス内の「左傾化」を告発する際に喚起される程度で、そのこと自体がまさに「アメリカン・レフト」がいかに現実とかけ離れた「イレレヴァント」な存在であるかを証明しているかのようだった。

では、いまなぜリベラル派が再び社会主義を受容し始めているのか。単なる目新しさだろうか。既成の政治勢力への不信感が高まる中、社会主義がこれまでアメリカの政治的ディスコースから排除されていたことが逆に強みになっているという点は挙げられるだろう。ある意味それは汚れていない。さらにポスト冷戦世代の影響も大きいだろう。いまや冷戦、そしてそれを構成したイデオロギー対立は

まったくリアリティがない世代にとって、社会主義と全体主義をリンクさせるのは、むしろ右派ポピュリズムこそが脅威であるという認識が強まる中、意味をなさない。

しかし、より重要なのは、新しいソーシャル・ジャスティスの感覚が、若い世代を中心に高まっていることだろう。彼らにとつて、社会主義とは厳密に定義されたものではない。もちろん、より厳密にそれを定義しようとする社会主義雑誌『ジャコバン (Jacobin)』周辺のような動きがあることは事実である。しかし、それはおそらく今の動きのコアではない。むしろ、格差、学費の高騰、地球温暖化、ジェンダー、そして移民をめぐる状況に関する意識が大きく変容する中で、そうした問題を発生させる「資本主義社会」のあり方に対する疑義が社会主義という言葉で表現されていると考えるべきだろう。そう考えると、その曖昧さも含めて、きわめてアメリカ的な社会主義の伝統に立脚した現象であると言い換えられるのではないか。

つまり、それは、特定の政治家と関連づけられる一過性の現象と考えるべきではなく、新しいソーシャル・ジャスティスをめぐる問題状況が発生する中で、アメリカの埋もれた政治的伝統を掘り起こそうとする試みであると見るべきではないか。●